



火箱コラム 3

自衛隊の特性を十分考量した

ハラスメント対応を望む

理事長 火箱 芳文

防衛省・自衛隊が「ハラスメントを一切許容しない組織環境の構築」を目指し、ハラスメント防止に真摯に取り組んでいる。パワハラ、セクハラ等に代表されるハラスメントはそれを受けた側の、人としての基本的権利を蹂躪し、侵害する行為で、場合によっては深刻な犯罪ともなりかねない。ハラスメントが発生した場合、結果として被害者・加害者双方の組織からの離脱や組織内の協力関係の崩壊など、組織全体の戦力の低下に大きな影響をもたらし、更には自衛隊への社会的信頼性が揺らぐ恐れがある。一般社会に比較すれば遙かにハラスメント発生の割合が低い自衛隊だが、自衛隊は一般の如何なる組織よりも、規律厳正、団結強固で、士気高らかな組織でなければならぬことは当然で、ハラスメント特にセクハラは罰則を厳しくしてでも根絶すべきだ。一方パワハラについては自衛隊という武装集団を十分考量した対応が必要である。防衛省のパワハラ定義は「職務の適正な範囲を超

えて、隊員に精神的もしくは身体的な苦痛を与え、または職場環境を悪化させる行為」である。

防衛省・自衛隊ではこれまで長くハラスメント防止に取り組み対策を講じてきたが、近年省内での各種ハラスメントの相談件数は増加の一途をたどるとともに、処分者数は2019年度から2021年度までに372人発生している。更に2022年9月には陸上自衛隊において性暴力事案として告発された衝撃的セクハラ事案が発生した。誠に遺憾である。これを受け防衛省は全隊員への特別防衛監察の実施、有識者会議の設置などを行い、この度「ハラスメント防止対策の抜本的見直しに関する提言」がなされた。その中で取り組むべき方向性として強調しているのが、各ハラスメント事案が個別事案に留まり、特に職場の監督者（指揮官）のハラスメント対策に係る責務への自覚が不足し、その責任が不明確であったこと。各幕僚長を始め現場指揮官等からの「ハラスメントは決して許さない」とするトップメッセージの発信が十分であったこと。国家の防衛という任務の遂行に際し生命の危険を伴う、厳格な統制が要請される隊員は、任務遂行のための厳しい教育訓練や長期的な集団生活に置かれること。また組織としての任務の遂行には、瞬時の判断・指示が求められ、自由の制限などが伴うことから、特に職務の適正

な範囲の指導とパワハラとの區別について、監督者（指揮官）、上官等上位の立場にある者とこれに従う下位の立場にある者との間で認識にずれが生じる場面が起り得ることから、あらかじめ明確な共通認識を組織として構築しておくこと。更に指揮する側の責務のみならず、指揮を受ける側の責務について明確にし、両者間の正しい指揮命令関係の維持のための実践的教育への転換を提言している。いずれも自衛隊という組織の特性を踏まえた上で傾聴すべき提言である。防衛省の定義するパワハラと教育訓練の境目また教育訓練と服務指導との範疇も曖昧で、各幕僚監部を始めとする上級司令部は早急に一般社会とは異なるパワハラに関する共通認識を構築し、自衛隊特有の基準作成に取り掛かり、全隊員に周知徹底すべきである。

特に平時有事を問わず自衛官は出勤すれば現場において、心身ともに極限状況に置かれる。その中で任務を完遂するには、一般の人とは違う戦闘戦技能力、気力、体力、忍耐力、戦場（現場）ストレス耐性等が必要になる。それを日常の営内生活を始めとする集団生活や教育訓練の中で養成している。訓練には精神的、身体的に苦痛を伴うものもある。苦痛を乗り越え限界に挑んでこそ練度等は向上し、これが有事個人の無事に繋がり、部隊に貢献することになる。仮に訓練指導に当たる指揮官等が大声で、罵倒、叱咤するのはストレス

耐性を高めるためにも時には必要なものである。これを下位の側からパワハラと訴えられ、結果断罪されるようなことが自衛隊ではあってはならない。報告書は貴重な提言をしているが理解できない点が一つある。それは部隊における集団生活を基調として組織・隊員の一体性を「家族」に例え、これが重んじられ、多用される傾向が見られ、「家族」やそこで「面倒見の良さ」という言葉によって「家族」だからこれ位なら許される」といったハラスメントに対する誤った認識を生じさせかねないとして、家族という言葉を多用しないように指摘している点である。自衛隊における教育訓練と服務指導は車の両輪である。服務指導の範疇の「面倒見の良さ」を「個人への余計なお節介」と捉えてのことと思われるが、部隊は有事運命を共にする仲間の集団である。その仲間同士とは日頃から家族以上の付き合いをしておく必要がある。部隊は上下左右強い団結をしておかなければ任務を遂行できない。なぜ部隊が家族のような集団ではいけないのか理解に苦しむ。パワハラを意識するあまり、委縮して教育訓練や服務指導に消極的になるような風潮を助長しては本末転倒である。

現場の指揮官等には「仕事（教育訓練）には火のように厳しく、個人への服務指導は優しく人を大切に」。澁刺颯爽とした部隊造りに励んで頂きたい。